

# 遠野人

遠野文化研究センターの活動に興味を持っていただけるような情報をお届けしています。  
今日は、伊能嘉矩と柳田國男についてです。

★筆者 菊池 健

遠野文化研究センター運営委員。1953年、遠野市小友町生まれ。30年間、盛岡市の岩手高等学校に世界史の教師として勤務。教師の傍ら、伊能嘉矩や遠野の郷土史などの研究に携わる。



伊能嘉矩



柳田國男

皆さん、柳田國男を知っていますか？『遠野物語』の著者で、皆さんにもおなじみかと思えます。柳田は貴族院書記官長まで務めた人で、とても偉い人だったのです。それでは伊能嘉矩を知っていますか？遠野生まれの郷土史家で、台湾原住民を研究した人類学者であり、遠野の社会科副読本にも掲載されています。この二人は『遠野物語』の出版前後にも会って話をしたことが柳田の記録から分かっています。

さて、紹介した二人について、経歴だけを見れば、柳田の方が偉い立場に見えますが、実際は柳田が伊能を「先生」と慕っていたのです。

資料を丹念に調べると柳田が「先生」と呼称していたのは数人しかいないことが分かりました。伊能を調査して約30年になる私は、衝撃を受けました。伊能のほかに柳田が「先生」と慕った中には、博物学者である南方熊楠、柳田の和歌の師匠である松浦辰男という人たちがいました。これがどれだけすごいことかと言うと、柳田は全国の学者や研究者と関わりがあり、その数は三千人を超えます。その中で柳田にとっての本当の「先生」はわずかしかないのです。そんなに偉い人がなぜ、地方の一郷土史家の伊能を先生と慕ったのか？まずは伊能の生い立ちを見てみましょう。

伊能は慶応3年(1867)、遠野南部氏の武士の子孫として生まれ、明治28年(1895)、台湾に渡り、10年間先住民族の調査研究を実施。遠野に帰郷後、台湾研究を進める傍ら、柳田國男や佐々木喜善などの民俗学者と交流し『遠野物語』の成立にも影響を与えました。

次に二人の関係について見てみましょう。柳田は生涯、遠野を3回訪れています。調べた結果、その訪問

はいずれも伊能とつながっていたと言えます。1回目は『遠野物語』出版前に遠野を訪れ、伊能に会い、遠野の歴史などについて話をしています。この伊能との初対面で、柳田は佐々木喜善との出会いと同等の衝撃を受けたと私は考えています。それが結果的に今後の遠野訪問につながっていくからです。2回目は柳田が三陸海岸を北上する旅に際し、わざわざ内陸の遠野に立ち寄り、伊能と会ったのです。訪問の理由は未だ謎ですが、当時の書簡などから、伊能に会うためだと推測しています。3回目は、はっきりしています。伊能が亡くなった翌年の大正15年(1926)、伊能の追悼会に出席するために遠野を訪れているのです。

伊能の死後も柳田は慕っていたようです。伊能が生前に残していた原稿について、遠野の方言や遠野に残るアイヌ語地名をまとめた『遠野方言誌』と、台湾研究史の大著『台湾文化志』の発刊に尽力し、柳田が自ら序文を添えました。さらに柳田の最晩年の『定本柳田國男集』(全36巻)の中にも、伊能へ捧げた序文を紹介しています。つまり、伊能の死後から自分の最晩年まで、伊能への尊敬の念は変わることはなかったのです。

これまで紹介したエピソードから、柳田がどれだけ伊能を慕っていたかがお分かりいただけたと思います。私は伊能の緻密な研究が柳田を驚かせ、その研究姿勢に尊敬の念を抱いたのだと考えています。皆さんのお考えもぜひ、教えてほしいと思います。

★募集のお知らせ

### 「佐々木喜善賞」(遠野文化奨励賞)を募集しています

日本のグリム・佐々木喜善の業績を記念し、遠野や『遠野物語』に関する自由な作品(論文、小説、詩、エッセイ、絵画、写真、映像、漫画、アニメなど)を募集します。応募規定など詳細についてはお問い合わせください。

- ◆表彰 優秀賞3点(表彰盾と副賞10万円)
- ◆締切 5月10日(金)必着



1\_ 青華と惣助の感動のシーンは観客の涙を誘った 2\_ バレエと青笹しし踊りも出演し、キャストとともに舞台を彩った 3\_ 巫女石池で羽衣を見つけ、お金になるとたくらむ惣助 4\_ 村の子どもたちに慕われる青華



## 第44回市民の舞台・遠野物語ファンタジーダイジェスト

# 天人子

~まごころの贈り物~

第44回市民の舞台・遠野物語ファンタジーは2月23・24日の両日、市民センター大ホールで公演。ここでしか見られない、市民手作りの感動の舞台は今年も、見る人の心を温かく包み込みました。

拍手が送られました。物語は、天から巫女石池へと降り立った天人子・青華と村の青年・惣助を主役に描かれた感動作。羽衣を取り戻そうと懸命な青華と、その姿に心揺れる惣助の心模様が描かれました。2幕13場の舞台では、キャストの情豊かな演技で観客を魅了。ファンタジーミュージックアンサンブルによる生演奏やスタッフらの活躍が物語の世界をより鮮明に引き立てました。

今作は、六角牛山の麓、巫女石池など、青笹町が舞台。昭和59年の第9回公演「羽衣の詩」(天人子)をモチーフに、細川順子(42)がリメイク。スタッフ・キャスト総勢300人が笑いと涙を誘う舞台を作りあげました。



6・7・8\_ 衣装や化粧、ファンタジーミュージックアンサンブルの生演奏など全てが市民手作りの舞台に惜しみない拍手が送られた



## Interview



演出部統括  
阿部 光禪 さん  
(33歳) = 新町 =

### よりよい舞台を皆で作る

今作は5人で演出部チームを初結成し、分かりやすく楽しい舞台を目指し検討を重ねました。次回は45回目の記念公演。心温まるひとときを過ごしてもらえよう、今後も皆でよりよい舞台を作りたいです。



青華役  
浅沼 未希 さん  
(遠野高3) = 宮守町 =

### ファンタジーはやっぱり楽しい

13回目のファンタジー出演。リメイク作の主役ということで、悩みやプレッシャーもありました。けれど、本番でお客さまからいただいた、たくさんの拍手に感動。やっぱりファンタジーは楽しいです！

※今月号の「遠野で起業に挑戦中！」のコーナーは紙面の都合で休載します。

★問い合わせ: 遠野市東館町3-9(遠野市立博物館内)/TEL:60-2800/FAX:62-5758/MAIL:tono100@city.tono.iwate.jp